

コンケン大学における日本の大学との合同プロジェクトの試み

坪根由香里

1. はじめに

日本国内で行う日本語教育と海外での日本語教育の大きな違いの1つは、学習者が日本語に接する環境にあるかどうかという点である。海外でも日本人が多くいる都市もあるが、教師と若干の日本人留学生以外、ほとんど日本人を見ることのないところで日本語を学んでいる学習者も多くいるだろう。そのような場合、自分が学んでいる日本語を実際に使用する機会が全くないというのが実情ではないだろうか。これまで、石田（1998）にあるように日本人大学生が日本語学習者の作文を添削したり、吉村・豊田（2001）では掲示板やメーリングリストを用いてメッセージを送り、それを日本語学習者がグループプロジェクトに活用したりするなど、遠隔地にいる日本語学習者と日本人学生との活動はいくつかなされている。また、坪根・鈴木（1997）では、日本国内の日本語学習者と他大学の日本人大学生が電子メール交換を行い、それが日本語学習者にとって日本語学習の動機付けになるとしている（pp. 48-49）。しかし、これらは電子メールを通じて行われているため、日本人との接触は書き言葉による。日本人と接する機会の少ない海外の学習者にとっては、電子メールという手段で生の日本語に触れる機会を持つことは、日本国内の日本語学習者以上に動機付けになり、また学習したことが本当に使えるかを試すいいチャンスになるが、本プロジェクトでは、話し言葉における学習者の動機付けも考え、電子メールの交換と同時にプロジェクトワークも行った。本稿はその実践報告である。

2. プロジェクトの概要

コンケン大学教育学部は2004年度より日本語教育の主専攻コースを開設し、2005年3月現在1年生21名、2年生23名が所属している。筆者は2005年度後期に2年生のJapanese for Communication IIおよびJapanese Reading IIを担当し、この両クラスの中で、日本の成蹊大学で日本語教授法のクラスを履修している大学生との合同プロジェクトを行った。なお、学習者のレベルは初級後半で、この学期で『みんなの日本語』が終了する。

2.1 Japanese Reading II：電子メール交換

このクラスはJapanese Reading という名前だが読解、漢字、作文を扱った。2005年後期に日本の大学と合同プロジェクトを行うという前提で、前期には日本語のタイプの仕方を学び、まず教師あてにメールを送る練習、その後、会話クラスに参加した日本人留学生にお礼のメールを送るという練習を一度行った。後期は日本の成蹊大学で日本語教授法を履修している学生の中から希望者を募り、コンケン大学の学生とペアを作ってメール交換を行った。双方の学生たちには教師

にもCcでメールを入れさせ、コンケン大学の学生には、10月中旬から1月末までに5回以上のメール交換をすることを課し、送信したメールの回数は成績を付ける際にスコアとして計算された。また、成蹊大学の学生は、メールを書く時、難しい漢字に平仮名を付けることを指示された。

2.2 Japanese for Communication II:プロジェクトワーク

前期は短いスピーチとロールプレイを行ったが、後期は初級最後の学期ということで、その他にプロジェクトワークを行った。以下は詳細である。

テーマ : タイのお勧めの場所

時間 : 3～4人のグループで、1グループ約10分+質問2分

その他 : パワーポイント、OHCなどのVisual Aidを使って、発表すること

活動の過程 : 11月2日 (水) グループ決定。各グループで「お勧めの場所」を決める。

11月16日 (水) アウトライン提出

11月30日 (水) 発表のしかた

12月7日 (水) 発表

・6グループの中でいいグループを3つきめて、そのビデオを日本に送付。

12月22日 (木)、1月12日 (木) 日本でコンテスト

このプロジェクトワークはコンケン在住の日本人および日本の大学の協力を得てコンテスト形式にした。まず、2005年12月7日にコンケン大学で全6グループが発表を行った。各グループの「お勧めの場所」はチェンマイ、トラード、プーケット、コンケン、カンチャナブリ、ウドンタニであった。この日はコンケン松下電工の日本人社員2名、日本からの留学生・研修生3名、日本語教師2名に審査員として来てもらい、6グループの中から上位3グループを決定してもらった。なお、選ぶ際には以下のようなポイントを参考にもらった。

- 1) 内容 : おもしろいか。そこに行ってみたくなかったか。言いたいことがよくわかったか。
- 2) 構成 : 全体の話の流れはわかりやすかったか。
- 3) 話し方 : 声の大きさ、なめらかさ、スピード、ポーズ、発音等聞きやすかったか。
下を見たり、スクリプトを読んだりしないで、聞いている人の方を見ていたか。
- 4) 視聴覚資料の使い方 : 発表をわかりやすく、また興味深くするために、写真や地図などを効果的に使っていたか。
- 5) 正確さ : 文法、言葉の使い方は理解できるものだったか。
- 6) 聴衆とのやりとり : 質問にうまく答えていたか。

3 グループのビデオ (VCD) を日本の成蹊大学に送付、日本人学生に評価してもらい、優勝グループを決定した。日本での評価の際は、担当教員が評価シートを作成し、日本人学生に点数およびコメントを記入させた。それを郵送してもらい、コメントは各タイ人学習者に配布した。

3. プロジェクトへのタイ人日本語学習者の評価

学期終了時に今回の合同プロジェクトに関するアンケートを行った。クラス内で内容説明をし、後日オフィス宛に提出してもらったため、22名中回答したのは17名であった。

3.1 電子メール交換

【表1】電子メールの送受信回数（人）

	1-2回	3-4回	5回以上
送信	5	6	6
受信	8	4	5

電子メールは5回以上送ることを課題としたにもかかわらず、17名中11名がその回数に達していない（表1）。これには様々な理由がある。1つの問題は、何名かのタイ人学生のメールが日本で文字化けしてしまったことである。Ccで届く筆者には正常に届いていたため、しばらくはその状況が把握できず、日本の教師と互いの学生のメールの状況を確認して初めてわかったものである。文字化けは解決できず、タイ人学生にMSWordで文書を作成して添付書類で送るように伝えたが、そのやり方がわからない学生が多くいた。結局方法を筆者が教えた時にはすでに時間が経過しており、十分にメール交換ができなかったようである。またメールアドレスが違っていた学生もあり、スタートまでに時間がかかったということもあった。2つ目に、設備の問題がある。コンケン大学教育学部内には学生が使えるコンピュータがあるが、そのすべてで日本語が使えるわけではない。また、その日本語が使用できるコンピュータの部屋を昼間は授業で使用している場合も多い。そのため、なかなかメールをする時間がなかったとアンケートに記述している。

今後もこのパートナーとメールを続けたいかという質問には、17名中11名が「はい」、6名が「いいえ」と答えた。その理由を尋ねたところ、「はい」と答えた人は「パートナーが面白い／かわいい人だった」5名、「日本人と友だちになりたい」2名、「日本語を使いたい」2名、「日本人と話すのが好き」1名、「日本について知りたい」1名であった。「いいえ」と答えた人の理由は、「日本人からあまり返事が来ないから」2名、「難しい」2名、「自分が質問して相手が答えるだけで、相手が質問してくることはなかったので、そのあと自分が何を書いたらいいかわからなかった」「寮にインターネットがない。インターネットカフェが遠い。文法が苦手」各1名であった。この結果を日本語能力に関する自己評価（1-7のスケールで1をpoor、7をexcellentとした）と合わせて見てみると、「はい」と答えた人の「書き」の自己評価の平均点は3.73であったのに対し、「いいえ」と答えた人の平均点は2.92で、「いいえ」と答えた人の方が0.8ポイント低くなっている。つまり、電子メールに対して消極的な人は他に理由はあるが、もともと書くことに関してあまり自信を持っていないと推察される。

では、学習者はメールのやり取りをする際、どのような点を難しいと感じていたのだろうか。

【表2】 メールを読んだり書いたりするときにたいへんだったこと（選択式複数回答）

項目	回答数
自分が送ったメールを日本人がわかっているかどうかわからなかった。	13
何を書いたらいいかわからなかった。	9
自分が送ったメールに日本人が興味を持っているかどうかわからなかった。	7
日本人のメールの中に、わからないことばや漢字がたくさんあった。	5
日本語でメールを書くのは、時間がかかりすぎた。	5
日本語のメールができるところが近くになかった。	3

表2の通り、最も多かったのは「自分が送ったメールを日本人がわかっているかどうかわからなかった」で、自分の書いたものが日本人に理解してもらえるかということを心配していることがわかる。「何を書いたらいいかわからなかった」「自分が送ったメールに日本人が興味を持っているかどうかわからなかった」がそれに次いで多く、自分の使える日本語の範囲で何を書いたらいいか、書いたものが日本人にとって興味深いかを気にしているものと思われる。

【表3】 日本人のメールを読むときに一番難しかったこと

項目	語彙	文法	漢字	全体の内容
回答数	4	8	4	2

【表4】 メールを書くときに一番気をつけたこと

項目	語彙	文法	漢字	全体の内容
回答数	1	14	0	2

次に、「日本人のメールを読むときに何が一番難しかったか」（表3）、「メールを書くとき何に一番気をつけたか」（表4）という質問には、ともに「文法」という回答が最も多かった。日本人のメールを読むときはその他に「語彙」「漢字」という回答も見られたが、自分が書くときには、ほとんどの学習者が文法に気をつけて書いていることがわかる。

では、学習者は日本人と電子メールをすることをどの程度役に立つと思っているのだろうか。「全然役に立たなかった」を1、「とても役に立った」を5として、1～5のスケールにマークをしてもらったところ、平均点は3.65であった。その理由は以下通りである。（自由記述。（ ）の中は回答数。以下同様。）

<肯定的な回答>

日本語（読み/書き/漢字/言葉）の練習になった。（6）

日本人の友だちができた。（5）

日本語のタイプの練習ができた。(4)

本当に日本語を使った。(3)

日本人/日本の大学生のライフスタイルがわかった。(2)

日本人にEメールを書く練習ができた。(1)

日本の知りあいと日本語でコミュニケーションできるようになった。(1)

最近の出来事がわかった。(1)

メールはインフォメーションの交換にいい。(1)

新しい文法がもっとわかるようになった。(1)

手紙の書き方も見られて勉強になった。(1)

日本語が上手になった。(1)

<否定的な回答>

日本語を使えるコンピュータが少なかったから、メールを送る障害になった。(2)

インターネットの店でもゲームをしている人がたくさんいて空いていなかった。(1)

役に立ったが、継続しなかった。(1)

あまりモチベーションがなかった。(1)

文法ができないので何を書いたらいいかわからなかった。(1)

返事があまり来なかったので、少ししか送らなかった。(1)

肯定的な回答を見ると、習った日本語を実際場で練習することができたこと、日本人の友だちができ、日本人の生活がわかったことが役に立ったという評価につながっている。スケールでは3にマークしている学習者も肯定的記述が目立った。つまり評価が高くはなかった学習者も電子メールの意義はある程度感じつつも、上記の否定的な回答で示したような理由などから今回のメール交換では大きな成果を実感できなかったのではないかな。

この「電子メールは役に立ったか」という質問で1～3にマークした人と4、5にマークした人を分けて、メールの送受信回数、メールをする前より日本が近くなったか(「全然近くならない」1～「とても近くなった」5のスケールにマーク)、メール交換が活発だったか(「全然活発ではなかった」1～「とても活発だった」5のスケールにマーク)、今後もこのパートナーとメールを続けたいか(はい/いいえ)、このパートナーの他にメールや手紙を書く日本人がいるかという質問の回答と比較してみる(表5)。表5の「送信回数」から「メール交換は活発だったか」までの数字は平均値である。

これを見ると、メール交換が役に立ったという気持ち強い学習者は送信回数 受信回数ともに多く、今後も続けたいと思っている人が多い。また、自分たちが活発にメール交換をしたという意識も強い。10名中6名は今回のパートナー以外にもメール相手があり、日本語でメール交換

【表5】「メール交換は役に立ったか」と関連する質問との関係

メール交換は役に立ったか	送信回数	受信回数	日本が近くなったか	メール交換は活発だったか	メールを続けたいか	他のメール相手がいるか
1～3	7人	2.86	2.43	2.36	2.57	はい 2人
4、5	10人	5.30	4.30	2.80	3.25	はい 9人

をすることにある程度抵抗なく入れたのだと思われる。ただし、「日本が近くなったか」という質問については、両者とも3以下で、交換回数が多くなかったためか意識の変化には結びつかなかったようである。

3.2 プロジェクトワーク

【表6】プロジェクトワークは日本語の勉強に役に立ったか

(全然役に立たなかった1～とても役に立った5)

回答	1	2	3	4	5	未記入	平均
人数	0	1	4	9	2	1	3.75

では、プロジェクトワークに対する意識はどうか。表6を見ると4が最も多く、役に立ったと思っている人が多いようである。2、3にマークした人もすべてその理由には肯定的なことを記述しており、プロジェクトワークをすることは学習者自身もその有効性を認識していると言える。以下はその記述をまとめたものである。

日本語をもっと練習できた/勉強した日本語が使えた/日本語が使えるようになった。(9)

新しい言葉をたくさん勉強した。(4)

グループのチームワークが作れた/友だちと一緒にできた。(3)

日本語が一つ上のレベルになる助けになった。(1)

タイ語から日本語に訳す練習ができた。(1)

勉強する気にさせてくれた。(1)

書く練習もできた。(1)

新しいものを得られた。(1)

自分の日本語のレベルがわかった。(1)

自分の弱点とそれをどう直したらいいかわかった。(1)

ツーリズムの日本語を使うことができた。(1)

日本人にタイの観光スポットを紹介できた。(1)

面白かった。(1)

外国語でパワーポイントを使っのての効果的な発表の仕方を学べた。(1)

日本語でみんなの前で発表ができた。(1)

自分が勉強してきた日本語を使い、みんなの前で発表することができたことに加え、新しい言

葉が勉強できたこと、グループで一つのものを完成できたことから来る達成感が肯定的評価につながっているようである。また、少数ではあるが、「自分の日本語のレベルがわかった」「自分の弱点とそれをどう直したらいいかわかった」というコメントからは、練習のための日本語使用でなく実際のコミュニケーションの手段としての日本語使用の場面から自分の日本語をモニターできたことがうかがえるのではないかな。

コンケン大学での発表の際に日本人が見に来たことへのコメントは以下の通りである。

<肯定的な回答>

(とても) いい。(8)

自分の弱点を知ることができた/自分の言語のスキルをモニターすることができた。(3)

発表者がやる気になった/よく準備した。(3)

日本人のコメント、アドバイスをもらってうれしかった。(2)

<否定的な回答>

緊張した/恥ずかしかった。(5)

正しい日本語を使っているかわからなかった。(2)

もっと少ない方がよかった。タイ人で日本語が話せる人だけでもよかった。(1)

日本人がわかってくれるか、内容が面白い心配だった。(1)

これを見ると、緊張したという意見も多いが、日本人が来ることが学習者の動機付けにつながり、自分の日本語を改めてモニターする機会になっているようである。「緊張した」「正しい日本語を使っているかわからなかった」という意見は、この学習者たちが初級後半のレベルであることと、日本人との接触が少ないことによるのかもしれない。今後、日本人との接触を増やし、慣れていくことである程度解決できるかもしれない。

4. プロジェクトへの日本人大学生の評価

日本人大学生にも筆者が直接電子メールで送り、それを返送してもらう形でアンケートを実施した。22 名中回答したのは 11 名であった。なお紙幅の関係で本アンケートの結果については活動の意義に関する部分のみについて述べる。

4.1 電子メール交換

【表 7】メール交換は有意義だったか（全然有意義ではなかった 1～非常に有意義だった 5）

回答	1	2	2.5	3	3.5	4	5	平均
人数	0	1	1	1	1	3	4	3.91

回答があったのが全体の半数であったため、この結果が日本人大学生の総意を表しているかどうかは不明だが、今回の結果では 4 と 5 に集中しており、表 6 のタイ人日本語学習者の結果 (3.75) を上回っている。では、日本人大学生がメール交換を有意義だと感じている理由は何かな。

<肯定的な回答>

日本語学習者がどのような間違いをするか／どのようなことに苦勞するかがわかった。

(2)

タイについて学ぶことも多かった／興味を持った。(2)

初めて外国人／アジアの人とメールをしたので新鮮だった。(2)

自分の何気なく使っている日本語をきちんと見直す機会になった。(1)

文通が楽しかった。(1)

実際に日本語を勉強している人とメール交換が出来てよかった。(1)

他の文化の人と会話することは有益だった。(1)

<否定的な回答>

メール交換の回数が少なかった／返事がなかった。(4)

現在三年生なので就職活動や、試験期間などとも重なり時間的に少し負担になった。(1)

文字化けをしてしまったりして大変だった。(1)

否定的な回答はメールの回数が少なかったことによるものが多かった。一方、肯定的な回答を見ると、日本語学習者がどのような文を書くのか、どのような間違いをするのかがわかったといった日本語教育に関連したコメントと、他の文化に接することができたことへの喜びを表したコメントの2つに分けられる。大学で日本語教育を学んでいる学生にとって、日本語学習者や外国の文化はまだ身近ではなく、その意味で今回のメール交換は有意義であったと言えよう。

4.2 プロジェクトワーク

【表8】プロジェクトの評価は有意義だったか（全然有意義ではなかった1～非常に有意義だった5）

回答	1	2	3	3.5	4	5	平均
人数	0	0	2	1	5	3	4.05

「プロジェクトを評価したことは、日本語教育を学ぶ立場として有意義だったか」という質問については、平均 4.05 で日本語学習者のプロジェクトの評価を有意義だと考える人が多かった。

<肯定的な回答>

日本語の難しい点、間違いやすい点を意識することができた。(3)

生の声が聞けた／話し言葉を分析することができた。(2)

タイ人学習者の発音の癖を知ることができた。(1)

外国で日本語を学んでいる人のレベルを知ることができた。(1)

日本語教師になった際、どのように評価すればいいのかを考えさせられた。(1)

日本語初級者の語彙力や文章力を実際に見ることができた。(1)

国が違っても自分たちとそんなに変わらないことを知った。(1)

授業も私たちが英語を学ぶときとそんなに変わらないことを知った。(1)

自分の外国語学習を客観視することもできた。(1)

タイについて深く知りたいと思うようになった。(1)

タイ人学生のイメージが良い方に変わった。(1)

<否定的な回答>

映像が見づらかったり音が聴きづらかったりしたので、あまり良くなかった。(1)

授業最後に無理やり詰め込んだため、ゆっくり評価する時間が持てなかった。(1)

以上の理由を見ると、肯定的なものには、学習者の生の日本語を聞くことから得たものについてのコメント、自分の外国語学習を振り返ってのコメント、タイという国への意識についてのコメント等が見られる。日本語教育を学ぶ学生にとっては教科書からだけでは学びにくいことを学べるいい機会であったのではないか。一方、否定的なコメントにあるように、今回の評価はこちらから送った VCD の音が小さくて聞きづらいところもあった。また、タイと日本の大学の学期がずれているため、こちらでプロジェクトを行って、それを日本で見てもらうタイミングが難しく、ビデオを見て評価するのが学期最後になってしまった。これについては、タイの学年の前期後半から開始し、後期前半で完成させるようにすれば解決できるかもしれない。

5. まとめと今後の課題

今回のプロジェクトは、日本人と接する機会の少ない海外の学習者にとって、生の日本語に触れる機会を作ることには動機付けになり、学習したことが本当に使えるかを試すいいチャンスになると考えて行ったものだが、アンケートの結果、電子メール、プロジェクトともに習った日本語を実際場で日本人相手に練習することができたことによる肯定的評価が多く見られた。電子メールは、日本人のいない環境の学習者が日本人の友だちを作る一つのきっかけとなり、書物や大学の授業からだけではわからなかった日本人のライフスタイルに触れられるという点で効果的であると言える。また、プロジェクトワークは、自分が勉強してきた日本語を使い、みんなの前で発表することができたことに加え、新しい言葉が勉強できたこと、グループで一つのものを完成できたことから来る達成感により、肯定的評価が多く見られた。一方、日本人大学生の方も、日本語教育を学ぶ立場として、教科書の中でなく実際の日本語学習者の書く文、話す言葉に触れ、どのような間違いをするかを理解できたことは大きな意義があったようである。また、他国の文化に接することができたことに対する肯定的評価も多く見られた。今回、電子メールという文字媒体のものとプロジェクトワークという音声媒体のものを同時に行ったことは、タイ人学習者が読み書きに加え、話すことに関しても生のコミュニケーションができたと同時に、日本人大学生が日本語教育を学ぶ上でも効果的だったのではないか。

しかし、アンケートからは問題点も多く見られた。まず、電子メールについては、技術的な問題、設備上の問題でメール交換があまり活発に行われなかったことが挙げられる。電子メールの

意義は理解しているにもかかわらず、本人の意思以外の理由でメールができなかった学習者にとっては非常に残念なことだったであろう。文字化けはどのように解決できるのか今のところわからないが、日本語が使えるコンピュータについては台数を増やす努力をする必要がある。また坪根・鈴木（1997, pp. 46-48）でも学習者が書くことに対して自信を持っていないとしているが、本調査でも学習者が日本語を書く際に自分の日本語が伝わっているのかを心配している様子がうかがえた。もともと書くことに対して自信のない学習者は電子メール交換をするにも消極的になってしまうため、まずは普段接している教師や同じ大学にいる日本人留学生など身近な人との交信から始めて、ある程度自分の日本語が通じるということを確認させてから、日本の大学生を相手に行ったほうが効果的かもしれない。また、日本人学生からの返事がないためにメールが思うように送れなかったものもいた。1 対 1 のメールはどちらかが止めてしまったら進まないというリスクがあるため、あるいはグループで行ったりメーリングリストを活用したりするか、掲示板のようなものを使うことも考えられるだろう。プロジェクトについては、行うこと自体に関しては否定的なコメントは見られなかったが、日本人ゲストを呼んだことに関してはやる気になったなどの肯定的コメントの他に緊張したという意見も多かった。これは今後、日本人との接触を増やし、慣れていくことによって解決できるのではないか。一方、日本人大学生にとっての問題点はやはり VCD の音の聞きづらさであろう。今後録画する場合に注意しなくてはいけない点である。

最後に、電子メールが動機付け以外に日本語学習者の日本語力に及ぼす影響について述べたい。日本人大学生への質問「コンケン大学の学生の日本語力に変化を感じたか」によると、11 名中 3 名が変化を感じた（語彙 2 名、自然さ 1 名）としている。これは主観的なものではあるが、この短期間のやり取りの中で 3 名が何らかの変化を感じたことは意味のあることではないか。今後、電子メールがどのように学習者の日本語力に影響を及ぼすのかも見ていきたい。

参考文献

- 石田敏子編（1998）『コンピュータ通信を利用した日本語通信教育及び教師養成のための試行的研究』平成 7 年度文部省科学研究費補助金一般研究 (C) および平成 8・9 年度文部省科学研究費補助金一般研究 (C) (2) 研究成果報告書（課題番号：07680307）
- 坪根由香里・鈴木庸子（1997）「中級の作文教育-意識調査、ワープロ・電子メール利用と作文の分析を通して考える『ICU 日本語教育研究センター紀要』第 6 号、43-59
- 吉村弓子・豊田悦子（2001）「インターネットでつなぐ日豪の教室-豊橋技術科学大学とメルボルン大学のメッセージ交換の試み-」『第 10 回小出記念日本語教育研究会予稿集』21-26